

派遣者番号	R3K27	氏名	前河 英臣
研究主題 —副主題—	不登校に対する予防的援助 —レジリエンス、ピア・サポートを通して—		
派遣先	早稲田大学 教職大学院	担当教官	高橋 あつ子
所属	江東区立豊洲小学校	所属長	中村 和弘

キーワード：不登校 自尊感情 レジリエンス ピア・サポート

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

文部科学省による「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、不登校児童・生徒数は増加傾向にあり、これからの学校に期待される役割の一つとしても、不登校等への対応が挙げられている（中央教育審議会、2012）。2020年度の調査結果から、不登校となった主たる要因は本人に係る状況の中の「無気力・不安」が小学校で46.3%と最も多いが、学校に係る状況として学業の不振、友人や教師との人間関係、進級時における適応の問題等が関係していると考えられる。また、不登校に関する調査研究協力者会議でも、不登校が生じないような学校作り等として、「心の居場所」「絆づくり」の場としての学校、全ての児童・生徒にとって、学校が安心感・充実感が得られる活動の場であるようにすることを挙げている（文科省、2016）。自分の居場所として安心して過ごすことができ、他者との絆を実感できる学級づくりができれば、児童が安心感を得られる学校となるであろう。教師は、当然そのような学級作りを心掛けているだろうが、不登校傾向の児童・生徒が在籍する場合、どのような二次・三次支援を追加すればいいかを議論できる場がある学校は少ない。

以上のことから、不登校は、その増加や要因の複雑化に伴って、学校の取組が具体的、予防的になっていない点で喫緊の課題の一つであると考えられる。

粕谷・河村（2004）は、不登校生徒と出席良好生徒の自尊感情を比較し、不登校生徒の自尊感情が低いことや、自尊感情が低い生徒が何らかのきっかけで学校不適応状態から不登校に移行した可能性を考察している。また、登校を続ける生徒の中にも、ソーシャル・スキルと自尊感情のどちらか、または両方が低い生徒も、何らかのきっかけ要因が加わることで不登校に移行する可能性を示唆し、学校現場では、学校不適応にいたる可能性を視野に入れながら、ソーシャル・スキルと自尊感情のアセスメントに基づいた援助が必要であると述べている。また、三浦・小島ら（2019）は、自尊感情とレジリエンスに正の相関があり、自尊感情が高いほどレジリエンスも高いことを述べている。

以上から、不登校の予防的援助として、児童にとって学級が「心の居場所」「絆づくり」の場となるように、アセスメントに基づいた一次支援、二次支援について検討することを本研究の目的とした。

## 2 研究の方法

### (1) 対象学級と期間

都内公立小学校 第5学年A組（38名）

ア アセスメント 6月2日～10月13日

イ 一次・二次支援 10月18日～11月8日

### (2) アセスメント

全体と個々の児童をアセスメントし、それに基づいた一次支援・二次支援の計画を立てるため、以下のことを行った。

ア 行動観察

イ 学習支援（T2として）

ウ hyper-QU（5月実施）の結果分析

エ 学級担任とのミーティング

### (3) 一次支援：レジリエンス

レジリエンスとは、精神的困難から立ち直る力のことである。三浦・小島・小室・岡本・西岡（2019）の研究から、自尊感情を高めることを目的に、一次支援としてレジリエンスの授業実践を行った。年間6時間扱いの学習プログラム（広島県立教育センター、2017）を参考に、学級や児童の実態に合わせ、学級活動の時間に計3時間のプログラムを作成し、実践した。（表1）

表1 学級活動指導計画（一次支援）

時	目標	主な学習活動
1	レジリエンスについて知り、自己目標を設定することができきる。	○人には様々な気持があることを経験から振り返り、めあてをつかむ。 ○池江瑠花選手の例から、困難から立ち直る力について考える。 ○身近な人や有名な人から、レジリエンスの高い人考え、共有する。 ○自分自身の困難から立ち直った経験を振り返る。 ○学習を振り返り、自己目標を設定する。
2	ネガティブ感情から抜け出す方法について考え、自分の生活に生かすヒントを見付けることができる。	○前時の学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 ○ネガティブ感情になる事例から、ネガティブ感情も生きていく上で必要であることや、ネガティブ感情の特徴を知る。 ○ネガティブ感情から抜け出す方法を考える。 ○本時の学習を振り返る。
3	自分を支えてくれる存在について振り返り、サポーターの存在がレジリエンス向上につながることを理解することができる。	○前時の学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 ○サポーター（支えてくれる・守ってくれる・助けてくれる・応援してくれる・一緒にいて安心する人）を想起する。 ○家族・友達・周りの大人等の視点で自分のサポーターを想起し、サポーターマップを作る。 ○マップを見て気付いたことや考えたことをまとめ、共有する。 ○これまでの学習を振り返る。

(4) 二次支援：ピア・サポート・プログラム活動

ピア・サポートとは、ピア (peer:仲間) で相互にサポート (support:支援) することで安心・つながり・絆を生み出し、思いやりのある学校風土を創造する (日本ピア・サポート学会) ものである。心の居場所や絆づくりには、教師との関係以上に、学級内の児童相互の関係に負うところは大きい。そこで、児童にとって友達とのつながりを感じられる、絆づくりの場と実感できるようにすることを目的に、参加希望児童を対象とした二次支援として、放課後にピア・サポート・プログラムの活動を実施した。(表2)

表2 放課後ピア・サポートプログラム 活動計画 (二次支援)

テーマ	主な活動
1 「ピア・サポート」について知ろう	○学校生活で困った経験と、解決した経験を想起し、自分たちの力で解決できるようにするための「ピア・サポート」であることを知る。 ○体験「パースディ・チェーン」 ○活動の振り返り「ピア・サポート」で興味のあること
2 自己理解：身近に仲間がいることを感じよう①	○活動のめあてを知る。 ○ウォーミングアップ「心のキャッチボール」 ○プラス・マイナスのメッセージについて ○次回予告と振り返り
3 自己理解：身近に仲間がいることを感じよう②	○前時のフィードバックと活動のめあてを知る。 ○主活動「プラスのメッセージを贈ろう」 ○活動のフィードバック・振り返り
4 話し方：対立解消の話し合い方を知ろう①	○前時のフィードバックと活動のめあてを知る。 ○ウォーミングアップ「WIN・WIN腕相撲」 ○OAL'Sの法則について知る。 ○次回予告と振り返り
5 話し方：対立解消の話し合い方を知ろう②	○前時のフィードバックと活動のめあてを知る。 ○主活動「対立解消のロールプレイ」 ○活動のフィードバック ○ピア・サポート活動のまとめと振り返り

(5) 効果の検討

- ア 自尊感情測定尺度 (東京都版) の事前・事後の結果による量的検討
- イ 一次・二次支援の児童の振り返りの記述を User Local AI テキストマイニングによる単語出現頻度で処理した質的検討

3 研究の結果

(1) 自尊感情測定尺度 (東京都版)

事前と事後の自尊感情測定尺度 (東京都版) の結果について、対応のある t 検定 (両側検定) を行った結果、表3のようになった。

表3 自尊感情測定尺度 (東京都版) の対応のある t 検定結果 (n:38)

	事前平均値 (標準偏差)	事後平均値 (標準偏差)	t値	
【第I因子】	3.17	3.29	-2.06	*
自己評価・自己受容	(0.61)	(0.66)		
【第II因子】	3.31	3.43	-3.01	*
関係の中での自己	(0.48)	(0.46)		
【第III因子】	3.15	3.36	-3.82	*
自己主張・自己決定	(0.50)	(0.55)		

\* p < .05

(2) 児童の振り返り記述 (単語出現頻度)

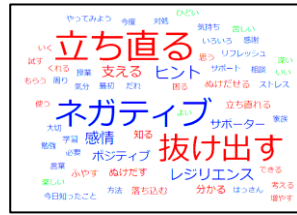


図1 レジリエンス振り返り

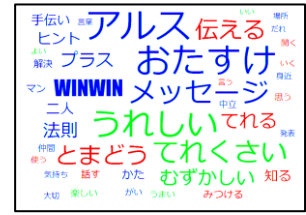


図2 ピア・サポート振り返り

4 研究の考察

自尊感情測定尺度 (東京都版) の結果から、第I因子は  $t(37) = -2.06, p = 0.01$ 、第II因子は  $t(37) = -3.01, p = 0.00$ 、第III因子は  $t(37) = -3.82, p = 0.00$  で、5%水準で有意差が見られた。第I因子は、自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることに関する因子、第II因子は、人との関わりを通して自分が人の役に立っていることや周りの人の大切さに気付くことに関する因子、第III因子は、今の自分を受け止め、自分の可能性に気付くことに関する因子である。レジリエンスという力について知り、サポーターの存在など立ち直るヒントについて考えたことが、周りの人の大切さに気付くことや今の自分を受け止めることにつながったのではないかと考える。

また、二次支援は参加希望児童との活動ではあったが、仲間とのつながりを感じる体験活動や、サポーターになるためのヒントを学んだことで、他者とのつながりや自分の可能性に気付くことにつながったのではないかと考える。一方で、要配慮児童の個別の数値には、大きな変容が見られなかったことから、アセスメントに基づいた三次支援の計画の必要性も明らかとなった。振り返りの記述によるテキストマイニングによる単語出現頻度で処理した結果からは、「レジリエンス」、「立ち直る」、「ネガティブ」、「ポジティブ」、「サポーター」、「プラス」、「メッセージ」、「アルス」、「おたすけ」という単語が多く見られた (図1・2)。このことから、本実践によって、児童はレジリエンスやピア・サポートの活動に興味をもって取り組み、新たな概念について理解できたと考えられる。一方で、「生かす」や「使う」などの単語はあまり見られないことから、知識として得た概念を実生活で活用できるようにするためには、レジリエンスの授業やピア・サポート・プログラム活動の指導計画の再検討や、継続的に児童への励ましや実生活での活用を意識付けられるような声掛けが必要であると考えられる。

5 今後の展望

今後、以下の三点等を検討していく必要がある。

- (1) 一次支援、二次支援の内容の改善
- (2) アセスメントに基づいた三次支援計画、実践
- (3) 教育相談部を核とした組織的なアセスメント、一次支援、二次支援、三次支援の推進